

## 丹後における導入期横穴式石室の系譜

細川 康晴

### 1. はじめに

京都府北部の丹後地域における横穴式石室の導入については、これまでTK10型式併行期の須恵器を出土する段階からであり、系譜の異なる複数型式の石室が、ほぼ同時に導入されているものと考えてきた。

今回は、個体ごとの型式差が大きく、系譜がたどりにくい堅穴系横口式石室の系譜の検討は機会を改めることとし、左右非対称両袖式横穴式石室の入谷西A1号墳<sup>(注2)</sup>(京都府加悦町)と右片袖式横穴式石室の崩谷3号墳<sup>(注3)</sup>(京都府久美浜町)の石室構造および年代を中心にその系譜を追うとともに、古墳時代後期の丹後の位置を考えてみたい。なお、本論で用いる横穴式石室の部分名称の左右の別は、すべて奥壁側から開口部側を見ての呼称とする。

### 2. 導入期横穴式石室の型式

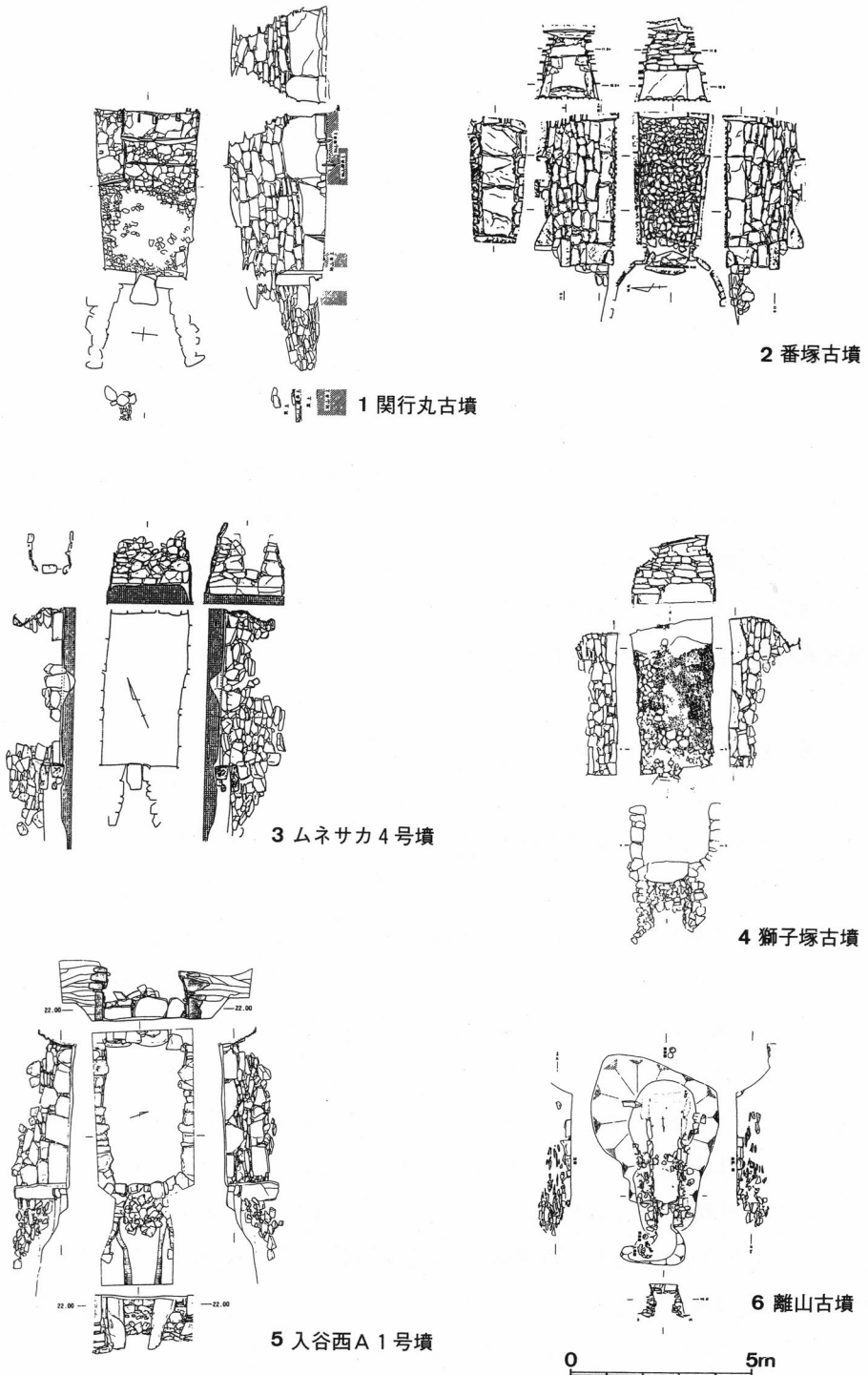
丹後の導入期の横穴式石室は、現在、以下の3つの類型に大別して考える。

**A型. 片袖傾向の両袖式横穴式石室タイプ(左右非対称両袖式)** 両袖式ではあるが、左右対称ではなく、開口部の位置が石室中軸線より、左右どちらかに著しく偏るもの。また、石室開口部は、きわめて短い前底部(天井石を架構しないもの)ないし羨道部を形成し、ハの字状に開くものが多い。これらは、玄門部に柱状の石材(玄門立柱石)を用いるか否か、石室奥・側壁の最下段(基底石)に大型の石材(腰石)を用いるか否かにより、さらに次の2型式に細分される。

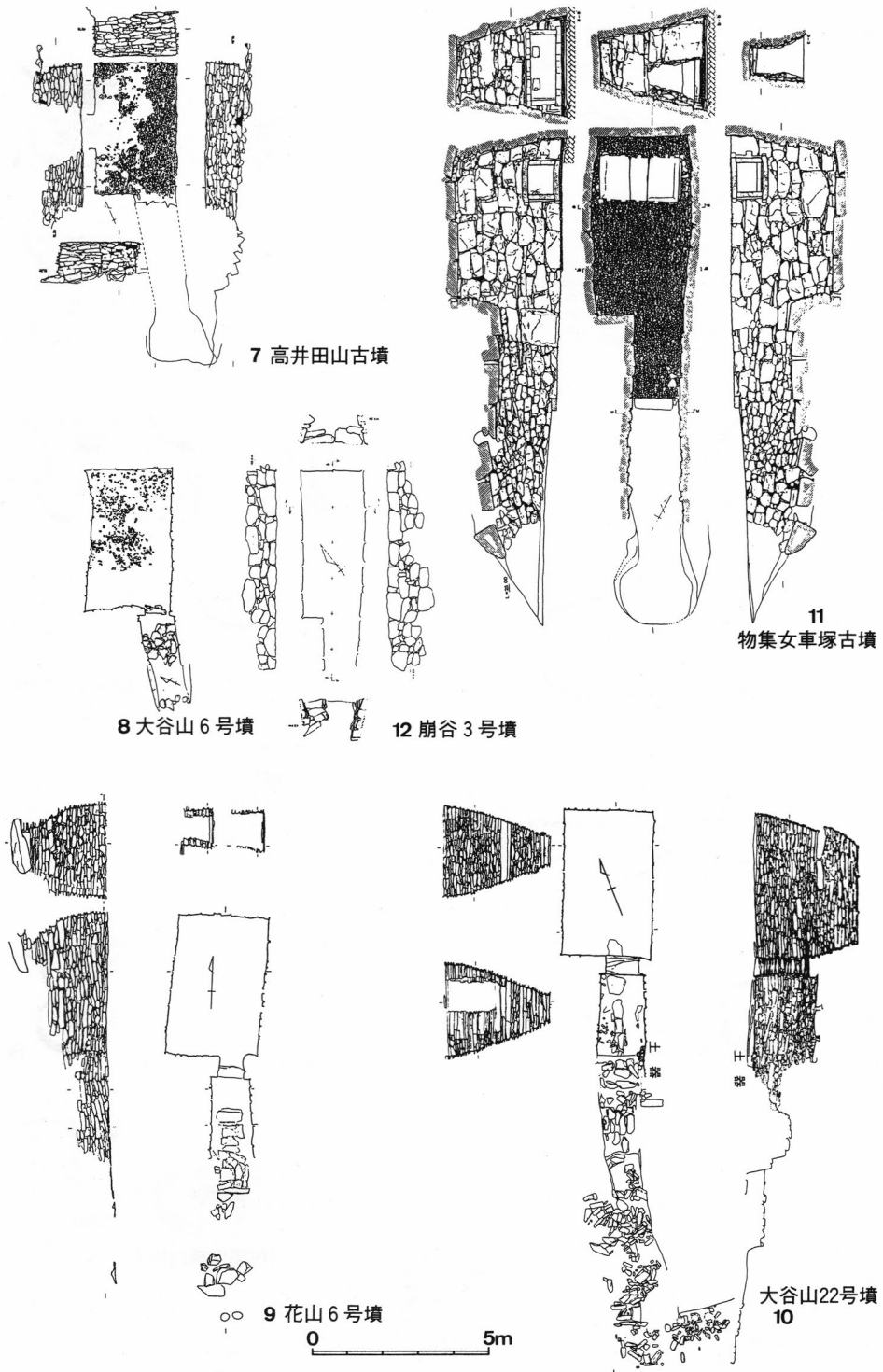
**A1型** ①袖部段積み構造を有する両袖式。②基底石から等質的な石材を用いる。丹後地域では、現在は確認できないが、他地域の類例として、ムネサカ4号墳<sup>(注4)</sup>(奈良県)、花山6号墳<sup>(注5)</sup>(和歌山県和歌山市)、大谷山22号墳<sup>(注6)</sup>(和歌山県和歌山市)がある。

**A2型** ①玄門立柱石を有する両袖式。②基底石にやや大型の石材を横積みする(腰石の使用)。丹後地域の類例として、入谷西A1号墳(京都府加悦町)、霧ヶ鼻10号墳第1主体部<sup>(注7)</sup>(京都府宮津市)があり、他地域の類例は獅子塚古墳<sup>(注7)</sup>(福井県美浜町)がある。

**B型. 右片袖式横穴式石室タイプ(右片袖式)** 右片袖式で、平面長方形プランの横穴式

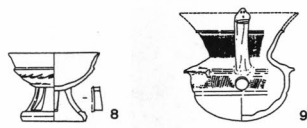
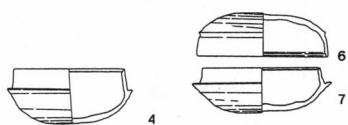


第1図 関連石室図(1)

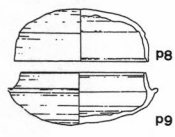


第2図 関連石室図(2)

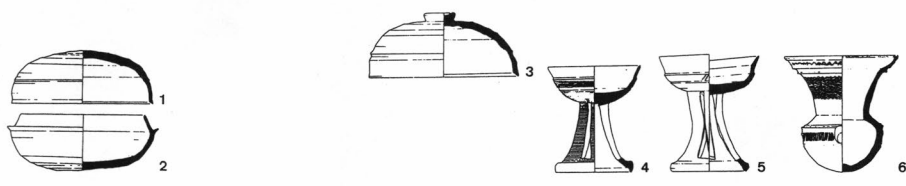
番塚古墳



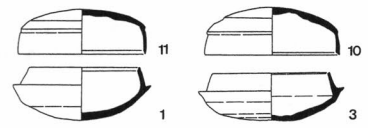
ムネサカ4号墳



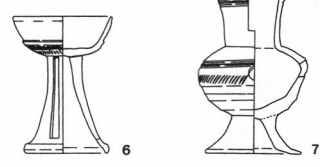
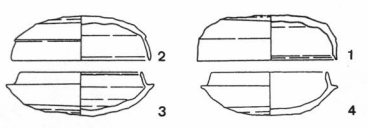
獅子塚古墳



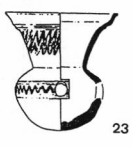
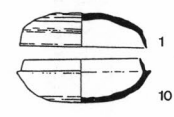
離山古墳



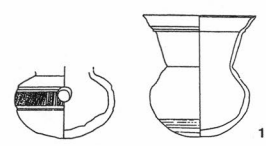
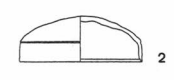
入谷西A1号墳



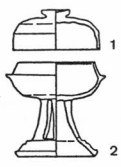
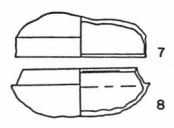
崩谷3号墳



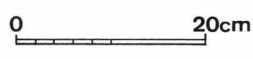
花山6号墳



大谷山22号墳



(円筒埴輪内出土)



第3図 関連須恵器実測図

石室。これは、袖石を1石で構成するか、段積みするかにより、細分される。丹後地域の類例として、崩谷3号墳(京都府久美浜町)があり、他地域の類例として、物集女車塚古墳(京都府向日市)<sup>(注8)</sup>などがある。

C型、**竪穴系横口式石室** 石室主軸に平行して埋葬を行ない、前壁構造を有さないもの<sup>(注9)</sup>。個々の石室の差が大きく、多様性を示す。丹後地域の類例として、離山古墳(京都府網野町)があり、他地域の類例として、流尾古墳(京都府夜久野町)などがある。

### 3. 入谷西A1号墳の検討

#### (1) 入谷西A1号墳の位置

野田川流域右岸の丘陵端部に立地する古墳で、墳丘が削平され、墳形・規模は明らかではないが、立地から、直径ないし1辺10m前後の円墳ないし方墳であると推定できる。

入谷西古墳群は、丘陵稜線上に立地する古墳群で、円墳14基、方形台状墓ないし方形低墳丘古墳36基からなる。このうち、A1号墳を含むA支群は、丘陵先端のA1・2号墳の2基のみが、横穴式石室墳であると考えられ、他の12基の円墳は、低平な墳丘をもつもので、木棺直葬などの竪穴系の埋葬施設を含むものと考えられる。また、丘陵南側斜面には、横穴式石室を内部主体とし、31基からなる密集型群集墳である入谷古墳群が立地し、丘陵稜線上に立地する入谷西古墳群とは異なった墓域を形成する。これらの石室は、小型で狭長な平面形を持つものが知られ、TK209型式併行期以降の須恵器を出土する。したがって、入谷西A1号墳は、入谷古墳群に先駆けて、竪穴系埋葬施設を主体として形成されてきた入谷西古墳群の中では、最後に築造された古墳である可能性が高い。

入谷西A1号墳の石室は、玄室奥壁幅約2.18m、左側壁長約3.69mで、左袖部の幅約0.9mで、玄室中軸線付近まで突出し、左片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室である。また、奥壁、側壁ともに基底石にはやや大型の石材を横積みにし、腰石とする。玄門部は袖石として方柱状の石材を立てて用い、玄門立柱石とする。また、開口部は、玄室奥壁・側壁に用いた石材よりも粗雑で不揃いな石材を乱雑に積み、ややハの字状に開き、本来天井石が架構されなかったものと推定できる。石室内出土須恵器のうち新相を示すものは、TK10型式の新相を示すものと併行関係にあり、石室の構築時期は6世紀中葉と考える。

#### (2) 型式間の比較検討

A型石室の分布は、点的で、地域の中では継続していかない地域が多いが、現在確認できる例を以下に抽出する。

① **A1型の検討 ムネサカ4号墳** 宇陀へ抜ける忍坂道沿いの粟原の丘陵稜線上先端部に立地する直径約19mの円墳であり、4基程度からなる古墳群であったと推定される。隣

接する丘陵上には、2～3基を単位とする古墳群を形成するが、なかには岩屋山式の横穴式石室を採用するムネサカ1号墳も含み、すべてが同一・連続する時期の古墳ではない。

玄室奥壁幅約2.20m、左側壁長約4.30mで、左袖部幅約0.9mであり、玄室中軸線付近まで突出し、左片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室である。奥壁および左袖部付近から初葬時のと思われる須恵器が出土したが、これらは、MT15型式に比定でき、石室の構築時期は、6世紀前半と考えられる。

**花山6号墳** 紀ノ川下流域の岩橋山塊に立地する古墳総数618基からなる岩橋千塚古墳群中の花山支群中に所在する全長49mの前方後円墳である。花山支群は、前方後円墳9基を含む86基の古墳により構成され、花山6号墳は丘陵の第2の高所に立地する。

玄室奥壁幅約2.55m、右側壁長約3.85mで、右袖部幅約1.55mであり、玄室中軸線をこえて大きく突出し、著しく右片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室である。石室攪乱土中から須恵器蓋、甕などが、墳丘の円筒埴輪中からは甕が、造り出しから蓋・杯・器台が出土し、MT15型式に比定でき、石室構築時期は6世紀前半と考えられる。

**大谷山22号墳** 岩橋千塚古墳群中の大谷山支群中最大の古墳で、全長約67～80mの前方後円墳である。大谷山支群は、4本の支尾根に分かれて前方後円墳6基を含む20基の古墳により構成され、22号墳は、丘陵合流点の頂上部に立地する。玄室奥壁幅約2.45m、右側壁長約3.95mで、右袖部幅約1.25mであり、玄室中軸線にほぼ一致して大きく突出し、著しく右片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室である。閉塞部に近い羨道部左側壁に沿って出土した須恵器は、MT15型式に比定でき、石室構築時期は、6世紀前半と考えられる。

②A2型の検討 **獅子塚古墳** 耳川左岸の平地に立地する、全長32.5mの前方後円墳で、周辺に小円墳の存在も伝えられるが、基本的に独立墳の様相を示す首長墳である。

玄室奥壁幅約2.50m、玄門部内側の石室幅約2.00m、左側壁長約4.50mで、左袖部幅約1.05mで、玄室中軸線にほぼ一致して突出し、左片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室である。開口部は、玄室部に比べ不揃いな石材をやや粗雑に積み、わずかにハの字状に開き、断面形も上開き気味に積まれるため、天井石が架構されなかったものと推定できる。須恵器は、MT15型式に比定でき、石室構築時期は、6世紀前半と考えられる。

③A1・2型の共通点 以上のことから、ムネサカ4号墳(A1型)と獅子塚古墳(A2型)、入谷西A1号墳(A2型)の3基の石室は、左片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室のなかでも、左袖部の位置が、奥壁中軸線上に一致して突出するという共通性を示す。さらに、ムネサカ4号墳と獅子塚古墳に共通して、玄室長が、奥壁幅の2倍近くの数値を示すことも注意を要する。また、A1型の中に入れて考えてきた、大谷山22号墳は、右片袖傾向の強い両袖式である。これは、袖部の左右の差を別とすれば、ムネサカ4号墳、獅子塚

古墳、入谷西A1号墳と共通する片袖傾向の位置関係にある。

④A型石室の出自 関行丸古墳<sup>(注10)</sup> 脊振山丘陵の南麓に立地する全長約55mの前方後円墳である。隣接して数基からなる古墳群を形成していたものと推定されている。玄室奥壁幅約3.00m、玄門部内側の石室幅約2.40mの逆台形状の玄室平面プランである。右側壁長は約4.30mで、袖部には、板石を縦積みに用い、内側に突出させるほぼ左右対称の両袖式である。短くハの字状に開く天井石が架構されない前底部を持つ。

関行丸古墳からは、須恵器の出土が見られず、年代の比定が困難である。出土遺物のうち三環鈴は、鈴のつく位置が、円弧を3分割して割り付けられた位置に取り付けられる大型タイプであり、獅子塚古墳、埼玉稻荷山古墳出土例<sup>(注11)</sup>と共通する6世紀前半の年代観を示す。しかし、三環鈴の出土状況は、羨道床面より70cm上面であり、三環鈴の示す年代観は、三環鈴が追葬時に片付けられたものであれば、関行丸古墳の初葬時の年代(石室構築時期)を示すものとして理解できるが、追葬時の副葬品の可能性もある。また、奥壁側には、板石で画された屍障が、玄室主軸直交葬のものが2体、右側壁側に主軸平行葬のものが1体の計3体分が設けられている。これは、鋤崎古墳<sup>(注12)</sup>(福岡市・主軸平行葬分は左側壁側)、横田下古墳<sup>(注13)</sup>(佐賀県浜玉町)と共通する。ここでは、関行丸古墳の築造時期は5世紀末～6世紀初頭と考えておきたい。

番塚古墳<sup>(注14)</sup> 周防灘に面した海岸部に近い丘陵先端部に立地する全長約50mの前方後円墳で、同一丘陵上の隣接地には、番塚古墳の前代の首長墓である御所山古墳がある。玄室奥壁幅約1.96m、玄門部内側の石室幅約1.50mの逆台形状の玄室平面プランである。右側壁長は約3.46mで、袖部には、方柱状の石を立てて用い、内側に突出させるほぼ左右対称の両袖式である。短くハの字状に開く前底部を持つ。玄門部付近および奥壁付近出土の須恵器は、杯の一部、無蓋高杯および甃はTK47型式に併行し、蓋杯にはMT15型式に併行する。石室構築時期は、6世紀初頭～前半となる。

以上のことから、両袖式の玄門立柱石およびハの字状に開く開口部(前底部)の存在は、5世紀末～6世紀前半の北部九州型の横穴式石室にその系譜がたどれる。したがって、入谷西A1号墳は、併行期の北部九州型の横穴式石室の影響を直接受けて成立したものではなく、1～2世代前の北部九州型石室ないしは、その影響下で変容しつつ成立した1世代前の若狭・紀伊・大和の片袖傾向の両袖式石室の影響を受けて成立したものといえる。しかし、北部九州型の横穴式石室のなかでは、片袖傾向の両袖式石室であることや、ムネサカ4号墳に見られる袖部段積み構造や、玄室平面形が、奥壁幅の2倍の玄室長を持つことなどは、理解できない。次章ではこの点を畿内型の横穴式石室に求めることとしたい。

#### 4. 崩谷3号墳の検討(B型=畿内型右片袖式石室)

B型石室の系譜は、先学の指摘のとおり、畿内型右片袖式横穴式石室に求められる<sup>(注15)</sup>。以下に、A型石室(片袖傾向両袖型)の出自系譜を検討する上で、関連する石室について検討を加える。

**崩谷3号墳** 川上谷川流域右岸の丘陵稜線上に立地する直径15~16mの円墳である。崩谷1・2号墳と同一丘陵上にあり、1・2号墳の木棺直葬墳と3基からなる支群をなす。

玄室奥壁幅約1.75m、右側壁長約4.05mで、右袖部の幅は約0.6mであり、奥壁幅の1/3程度の幅で、突出する右片袖式の横穴式石室である。玄室右奥隅部分出土の甕および、墳丘盛土単位上面から出土した組み合わせられた状態の蓋杯1組のセットは、出土須恵器のうち古相を示し、TK10型式に併行するものである。とくに、墳丘出土の蓋杯は、石室構築過程における祭祀行為に伴う可能性があり、古墳築造時の遺物とみてよい。すなわち崩谷3号墳の築造時期は、6世紀中葉と考えられる。

**高井田山古墳<sup>(注16)</sup>**(大阪府柏原市) 6世紀中葉から始まり162基からなる高井田横穴群に隣接して、丘陵端部に所在する直径約22mの独立した円墳である。玄室奥壁幅約2.34m、右側壁長約3.73mで、右袖部幅は約1.15mであり、玄室中軸線に一致して突出する右片袖式の横穴式石室である。羨道部主軸は、玄室主軸とは一致しない。出土須恵器は、TK23ないしTK47型式に比定でき、現在須恵器で確認できる最も古い畿内型右片袖式の横穴式石室であり、石室構築時期は、5世紀末葉~6世紀初頭となる。

**大谷山6号墳<sup>(注17)</sup>** 先に見た大谷山22号墳と同一丘陵上にある。玄室奥壁幅約2.40m、右側壁長約3.83mで、右袖部幅は約1.70mであり、玄室中軸線をこえて大きく突出する右片袖式の横穴式石室。羨道部主軸は、玄室主軸とは一致しない。攪乱土中出土した須恵器蓋杯・無蓋高杯・器台はMT15型式に比定でき、石室構築時期は、6世紀前半と考えられる。

**物集女車塚古墳** 向日丘陵から東方に派生してのびる段丘上に立地する全長43~48mの前方後円墳である。玄室奥壁幅約2.55m、右側壁長約5.07mで、右袖部の幅は約1.05mを計る右片袖式の横穴式石室である。玄室長は奥壁幅のほぼ2倍にあたる。袖部は、最下段の石材を立てて用い2石目を横積み、前壁との間を小石塊で埋める。石室内出土須恵器は、TK10型式の新相で、石室構築時期は、6世紀中葉と考えられる。

以上のことから、高井田山古墳と大谷山6号墳は、玄室平面形が、きわめて類似し、羨道部主軸が、玄室主軸に対して振っている角度もほぼ一致する。また、大谷山6号墳と大谷山22号墳の玄室平面形はほぼ一致し、高井田山古墳(右片袖・TK23~47)→大谷山6号墳(右片袖・MT15)→花山6号墳(右片袖傾向・MT15)→大谷山22号墳(右片袖傾向両袖・MT15)という系譜がたどれる。これは、変化の方向として右袖部の幅が徐々に縮小



し、大谷山22号墳の段階では、右袖部の位置が、玄室中軸線に一致して突出し、片袖式から右片袖傾向の両袖式を経て、左右対称の両袖式へと変化することが確認できる。

また、北部九州型の横田下古墳と高井田山古墳の玄室平面形は、ほぼ一致する。横田下古墳も右片袖傾向の強い両袖式の横穴式石室ではあるが、この時期にさかのぼり畿内型右片袖式横穴式石室が成立している可能性があり、横田下古墳が畿内型右片袖式石室の影響を受けた可能性はあるが、将来の検討の課題としたい。

以上、片袖傾向の両袖式石室は、北部九州型の横穴式石室の影響のみならず、畿内型の右片袖式石室の影響もまた受けて成立したものであることが確認できた。また、袖部段積み構造であることも、古式の畿内型右片袖式石室の属性のひとつであり、玄室平面形が、奥壁幅の2倍の玄室長を持つことも、物集女車塚古墳などに見られるように定型化した大型の畿内型右片袖式石室の主流を占めるものである<sup>(注18)</sup>。

## 5. まとめ

入谷西A 1号墳が属すこれら、左(右)片袖傾向のきわめて強い両袖式という共通性を持つ一連の横穴式石室の出自は、併行期の北部九州型の横穴式石室そのものではなく、両袖式、玄門立柱石、ハの字状に開く短い前底部、腰石の使用については、1～2世代前(5世紀末～6世紀初頭)の北部九州型の横穴式石室の影響を受け、片袖傾向、袖部段積み構造、奥壁幅の2倍の玄室長については、畿内型右片袖式横穴式石室の影響もあわせて受けつつ成立したものであることが明らかとなった。

とくに、これら一連の石室が紀伊、大和、丹後、若狭に分布していることは、注目してよい。大和のムネサカ4号墳は、袖部段積み構造、腰石を用いず、奥壁幅の2倍の玄室長であることから、畿内型右片袖式横穴式石室の影響を最も強く受けている。しかし、この石室は大和の石室の主流にはなり得ず、この後は、二塚古墳(奈良県新庄町)に見られるようなTK10型式の新相を示す須恵器を出土する段階から、左右対称大型両袖式石室の成立が見られ、右片袖式と両袖式が平行して行なわれ、北部九州型の系譜を引く石室は途絶<sup>(注19)</sup>する。

紀伊については、畿内型右片袖式の大谷山6号墳→花山6号墳→大谷山22号墳という片袖式から片袖傾向の両袖式を経て、左右対称両袖式という系譜がたどれ、片袖傾向の石室が見られた地域のなかでは、唯一石室系譜が変容しながらもつながっていく地域である。若狭では、向山1号墳(福井県上中町)が、本州の中で北部九州型の横穴式石室を最も早く受容した古墳であるが、獅子塚古墳の段階では、北部九州型横穴式石室の影響のみならず、畿内型右片袖式横穴式石室の影響を受け、続くTK10型式併行期の丸山塚古墳(福井県上

中町)では、左片袖式ではあるが、畿内型大型片袖式石室が成立しており、北部九州型石室の系譜は途絶える<sup>(注20)</sup>。

丹後では、MT15～TK10型式に併行する時期の石室は、久美浜では、同時期の畿内型右片袖式横穴式石室そのものがそのままストレートに導入され、野田川流域では、同時期ではなく1～2型式前の北部九州型の横穴式石室の強い影響を受けつつ、一方では畿内型右片袖式石室の影響を受けたものが導入されており、これは大和・紀伊・若狭の石室に強い共通性を持つことが確認できた。しかし、丹後でも、北部九州型の横穴式石室の影響を受けた石室は、今のところ野田川流域のみにとどまり、後に続かない。

また、竹野川流域では、太田2号墳<sup>(注21)</sup>(京都府弥栄町)、桃山1号墳<sup>(注22)</sup>(京都府峰山町)、大耳尾1・2号墳(京都府峰山町)など地域の首長墓ないし有力墳はすべて木棺直葬墳であり、横穴式石室の採用にあたっては、保守的な地域である。大耳尾2号墳第1主体部出土の角杯形須恵器は、型式・胎土ともに獅子塚古墳のものとは異なり、角杯形須恵器を出土するという点をのぞけば獅子塚古墳とは共通性が乏しい。これは、須恵器の搬入と石室の受容・構築が異なるルート・レベルで行なわれた可能性があることを示すものとも考えられる。つまり須恵器は製品のみを運搬することが可能で、石室の構築は専門の工人の派遣を伴う。さすれば、北部九州の技術で作られた石室は、北部九州の工人ないしは、その技術を保持した工人が派遣され、石室平面形には畿内中枢勢力の意志が強く反映されているものとも考えられる。

最後に、畿内型横穴式石室ないしその影響を受けた片袖傾向の両袖式石室の成立の時期の6世紀の初頭から前半(TK47・MT15型式)は、継体朝にあたり、磐井の乱を経て、北部九州の石室形態が変化する6世紀中葉(TK10)ないし、6世紀後半(TK43)にかかる、畿内型左右対称大型両袖式石室の成立が欽明朝にかかわるものである可能性を示し今後の検討の方向性とした<sup>(注23)</sup>。

最後になりましたが、杉原和雄、佐藤晃一、磯野浩光、肥後弘幸、両丹考古学研究会、但馬考古学研究会の各氏には、いつもご教示、ご指導いただき、記して感謝の意を表します。

(ほそかわ・やすはる＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966 以下須恵器の型式は本書による。

注2 佐藤晃一『入谷西A-1号墳発掘調査概要』加悦町教育委員会 1983

注3 森下 衛「1 崩谷古墳群」『埋蔵文化財発掘調査概報(1989)』京都府教育委員会 1989

注4 泉森 皎・河上邦彦「5 ムネサカ4号墳」『奈良県古墳調査集報I』(奈良県文化財調査報告

- 書第28集 奈良県立橿原考古学研究所) 1976
- 注5・注6 関西大学文学部考古学研究室編『岩橋千塚』 1967
- 注7 入江文敏「117 獅子塚古墳」『福井県史 資料編13 考古』 福井県 1986
- 注8 秋山浩三・宮原晋一ほか『物集女車塚』(向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集 向日市教育委員会) 1988
- 注9 蒲原宏行「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』 雄山閣 1983
- 注10 渡辺正気『佐賀市関行丸古墳』(佐賀県文化財調査報告書 第7輯 佐賀県教育委員会) 1958
- 注11 埼玉県教育委員会編『埼玉稲荷山古墳』 1980
- 注12 柳沢一男編『鋤崎古墳 1981～1983年調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 福岡市教育委員会) 1984
- 注13 唐津湾周辺遺跡調査委員会『末盧国』 六興出版 1982
- 注14 岡村秀典・重藤輝行編『番塚古墳』 九州大学文学部考古学研究室 1993
- 注15 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜－畿内型と九州型－」『古代学研究』111号 古代学研究会 1986
- 注16 安村俊史・桑野一幸『高井田山古墳』(柏原市文化財概報1991-Ⅲ 柏原市教育委員会) 1992
- 注17 笠井保夫ほか『岩橋千塚大谷山4・5・6・39号墳発掘調査概報』 和歌山県教育委員会 1977
- 注18 岡野慶隆「畿内における初期横穴式石室の一形式－勝福寺古墳北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけ－」『関西学院考古』第9号 関西学院考古学研究会 1991
- 注19 森下浩行「畿内大型横穴式石室考－後期古墳時代・畿内型A類の様相－」『考古学と地域文化』(同志社大学考古学シリーズⅢ)同志社大学考古学シリーズ刊行会 1987
- 注20 入江文敏「若狭地方における首長墓の動態－主体部・副葬品の分析を通して－」『福井県史 資料編13 考古』 福井県 1986、柳沢一男「若狭地方の古墳の源流を探る」『特別展 躍動する若狭の王者たち－前方後円墳の時代－』 福井県立若狭歴史民族資料館 1991
- 注21 堤 圭三郎「太田2号墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』 京都府教育委員会 1970
- 注22 三好博喜「桃山古墳群」『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
- 注23 注19に同じ

